

子ども達の作品から

○きゅうでん はがき新聞コンクール

夏に応募があった「きゅうでん はがき新聞コンクール」で、3年生のK・Tさんの作品（右）が、優秀賞を受賞しました。K・Tさんの作品は「地球温暖化」の問題に取り組んだものです。受賞、おめでとうございます！



○青少年読書感想文全国コンクール

「校長室だよりNO 34」で紹介した通り、「青少年読書感想文全国コンクール」において、本校から4人の児童が受賞しました。その中で「特選」を受賞した2名の感想文を紹介します。

今回紹介するのは、5年生のT・Hさんの感想文です。

「自由への道」を読んで

麻生学園小学校 五年 T・H

『自由への道』と書かれているこの本の表紙には、きれいな夜明け前の空を見上げる裸足の黒人女性が描かれていて、それが気になり手に取ってみました。奴隸解放に命をかけた黒人女性は、自由を手に入れるために、どのような事をしてきたのだろうと興味を持ちました。奴隸生活ってどのような生活だったのか、どんなに過酷な環境だったのか気になりました。どうやって、自分だけでなく、仲間の奴隸を自由の地に導いたのか強く興味をもち読み始めました。

ミンティは黒人の家族に産まれ奴隸として働き始めました。はたで布を織る仕事をさせられましたがうまく出来なかつたらムチで何度もたたかれました。他にも色々な仕事をさせられては、「役立たず！」と言われムチで叩かれる日々でした。もう私は胸がとても苦しかったです。今、私は十歳で家事の手伝いなど時々するけど毎日ではありません。失敗したら、ムチで叩かれるなんて、読んでいるだけで、体がふるえて、こわくなりました。

私が一番心に残ったのは、はじめて他の奴隸が起こした反乱を知り、自由とは何かを考えるようになった所です。奴隸生活では、身体的労働だけでなく精神的にも支配されているため、疑問をもつこともなかったのです。しかし、初めて外の世界に興味をもち自分達黒人奴隸と白人の違い、自由の意味について考え、世の中の矛盾に気付いたのです。

ミンティは結婚して「ハリエット」という名前になりました。結婚も奴隸主の許可が必要で住む家も奴隸主の指示で決められ、子どもが出来ても、赤ちゃんは奴隸主のもので奴隸になるのは決まっているのです。奴隸の子どもは奴隸・・・。なんて未来のない世界なんだろうと絶望的な気持ちで読み続けました。奴隸制度に反対しているクエーカー教徒の人と出会いハリエットは二十七歳の時、逃亡を決意しました。命がけの逃亡は、読みながら、ハラハラドキドキしました。つかまってもっとひどい仕打ちを受けるのではないか、危険を犯してまで逃亡しない方が、まだ楽なんじゃないかと私は何度も自問自答を繰りかえしました。

逃亡奴隸には、賞金がかけられておりどこまでもしつこく追いかけられました。奴隸制度に反対する人達をしゅうげきされたり、殺されたりすることもあり、おそろしいことが堂々と行われる時代でした。しかしとうとうハリエットは、クエーカー教徒の逃亡奴隸を支援する組織の人達の協力を受けて、逃亡に成功しました。読み終えて、怒りと感動が混ざった気持ちで、涙が流れました。

黒人だから生まれた時から奴隸になるなんて、あってはならないと思います。この本は自由はつかみとるものだと教えてくれました。私にとっての『自由への道』とは何かを、考え続けたいと思います。

